

「底が突き抜けた」時代の歩き方 288

なぜ、アメリカは同時中枢テロにパール・ハーバーを重ねるのか

ニューヨークに住むジャーナリストの馬場恭子が『論座』(01・11)の中で、同時中枢テロによって世界貿易センターの双子ビルが崩壊したおかげで、マンハッタン南端のスカイラインが《ポッカーリと穴があいた》ようになっていることを、不安と恐怖におののいているニューヨーカーのトラウマに重ねてみている。《恐怖感は日がたつにつれアメリカ全土で根を深く下ろし始めている》が、《なぜ彼らはこれほどまでの恐怖を抱》くのかについて、こう書いている。

《それは一言でいえば、本土が外敵の攻撃を受けたことがないからだ。テロ惨事の翌日の9月12日付「ニューヨーク・タイムズ」のバナーは、

「アメリカ攻撃される(U.S. ATTACKED)」

だった。他紙・誌も「攻撃」「惨事」「テロリスト」という言葉を好んで用いている。

テロ事件のニュースに驚愕したアメリカ人は、直ちに「パール・ハーバー」(真珠湾攻撃)を連想し、プレスと政治家はこの表現をしばしば口にした。

「21世紀のパール・ハーバー」

と公言した政治家もいた。また、「体当たり奇襲」は「カミカゼ」に結びつけられた。

9月15日付「ニューヨーク・ポスト」の見開き2ページ(...)にわたるバナーは、

「われわれのど真ん中にある怪物ども」

というメインに続くサブとして、

「連邦警察はカミカゼ殺人者19人の名前を発表」

と掲げた。

ただし、日米関係に配慮したブッシュ政権は「パール・ハーバー」を引き合いに出すことはせず、「21世紀初めての戦争」と定義している。9月13日付「ニューヨーク・ポスト」で同紙のコラムニスト、ロバート・D・ノヴァクはこう述べる。

「日本の奇襲との類推が、政治指導者たちとジャーナリストによってしばしば行われている。(しかし)元上院議員で鋭い歴史的感覚を持つダニエル・モニハンはそれに賛成しない。(彼いわく)『これは、つまるところ、パール・ハーバーではない。われわれは太平洋艦隊を失ってはいない』」

学者出身の良識派、モニハンらしいコメントである。

元外交官のアメリカの友人に、パール・ハーバーと今度の奇襲に対するアメリカ人の

反応はどう違うのか聞いてみることにした。

「違うのは衝撃を受けた度合いだと思う。この事件は突然で正当な理由がない。またメディアの発達で今は事件を映像で見ることができるので、感情が直にショックを受け、怒りの度合いが強烈になった。だが基本的には似たようなものです。事件に対する反応は同じですから。怒り、立ち上がり、そして復讐の決意をした。それにしても、あの当時の技術でアメリカ海軍の心臓部だったハワイ基地を奇襲した日本軍には、私たちは驚愕しましたよ。(以下略)」

もう一つ、在米ジャーナリスト佐藤徹のドキュメント(『新潮45』01・11)の中で、パール・ハーバーとの比較が取り沙汰されている箇所を抜き出してみる。同時多発テロから一夜が過ぎた9月12日の午前10時、佐藤氏は地下鉄のニュース・スタンドで新聞を買い込む。

《1941年12月7日、日本軍がパール・ハーバーを奇襲した時のような見出しが一面に躍っている。

「アメリカ攻撃される」(ニューヨーク・タイムズ)「戦争だ」(デイリー・ニュース)「戦争行為」(ニューヨーク・ポスト)「大量殺戮行為」(ニュースデイ)

昨夜、テレビのニュースでは同時多発テロと60年前の真珠湾攻撃を同一視する報道が繰り返された。「スニーキー・アタック」奇襲という卑怯さが共通項なのか。スーパー・パワー、アメリカへの先制攻撃が許し難いのか。カミカゼ攻撃という神の威徳によって吹くという風が無気味なのか。テロルが一夜明けるとアメリカの気分は報復戦争に変わっていた。(中略)

今朝、ラスベガスにいる妻からホテルに電話があった。妻の情報によるとサンフランシスコの総領事館が今回のテロは「リメンバー・パール・ハーバー」という反日感情を刺激する可能性があるのでは在留邦人はあまり出歩かない方がいいとラスベガスの日本人補習学校に勧告したそうだ。領事館は何をバカなことをこの期に及んで言っているんだと私は激怒してしまった。原爆を落とされて無条件降伏をさせられても在留日本人はいまだにおどおどした敗者の羊であり続けなくてはならないのか。

1941年の真珠湾攻撃は数カ月前に封切りされた映画「パール・ハーバー」で確かにアメリカ国民に思い起こされている。そしてニューヨーク・ポスト紙9月14日付けには「12月7日、日本軍は350機の戦闘機で真珠湾に停泊していた海軍艦隊を襲撃し、2300人以上のアメリカ人の命を奪った」との記事が掲載された。

9月15日付けの雑誌「エコノミスト」にはコリン・パウエル国務長官のコメントが紹介されている。

「今回のテロにも信頼しうる警告がなかった。敵はアメリカの力の象徴を攻撃した。(パール・ハーバーとの) 主要な違いは標的がアメリカ本土で何千マイルも遠くの離島では

なかったことだ」

私は再び憂鬱になった。まだ第2次世界大戦は終わってはいなかった。

9月11日の同時多発テロによる死者と行方不明者は7000人を超えそうだ。真珠湾の犠牲者の3倍以上の死者に報いるためアメリカはどのような報復戦争に出るのだろうか？（中略）ヒロシマ、ナガサキ以上の報復があり得るのだろうか？（中略）

「リメンバー・パール・ハーバー」とともに2001年9月11日は思い出すべき日として来世紀までも語り継がれるだろう。」

このレポートは9月17日の次の鮮やかな光景を切り取り、緊急事態の中で浮かび上がってくる人々の動きを簡潔に粗描して締め括られる。

《午後4時、証券取引が終わる。ウォール・ストリートにはまだカストロフィーの傷痕が痛々しく残されていた。ビルはまだ埃を被ったままだし、道路は放水で水びたしだ。車両進入規制で交通量は異常に少ない。若い女性ジョッガーがショーツの後ろにアメリカの小旗を挟んで私の目の前を風のように疾走していく。アップ&ラン。女性の凜とした姿勢に私はアメリカの力を感じた。強烈なパンチを食らっても、すぐに立ち上がって走り出すアメリカ流の矜持が背中に見える。

振り返るとこの1週間は、1年間よりも長く感じた。この間、ニューヨークでは軍に志願する若者が急増した。犯罪が2週間前と比べると14%も減少した。ワークアウト・ジムの会員数が29%も増えた。ガスマスクと、空港で金属探知機に引っかからないプラスチック製のポケットナイフの売り切れ状態が続いている。家庭裁判所に調停を求めている夫婦が、次々に離婚をキャンセルしているとも聞く -。》

この「リメンバー・パール・ハーバー」に関しては当然のことながら、日本の年長の、どちらかといえば保守的な知識人層から多くの反撥が湧き起こっている。誰もが指摘するように、今回の同時中枢テロとパール・ハーバーがいかに奇襲攻撃と本土攻撃の点で似通っていたとしても、今回のテロと明らかな戦闘行為としてのパール・ハーバーとが本質的に異なることはいうまでもない。パール・ハーバー奇襲についてもよくいわれるように、攻撃前の開戦通告が在米大使館の怠慢で攻撃後になってしまっただけのことで、意図通りの「騙し討ち」というわけではなかった。アメリカがパール・ハーバーを持ち出すなら、こちらだって言い分はいくつもあるといった調子の反撥がみられる。そこで目につくのは、パール・ハーバーに対する報復爆撃であり、広島、長崎への原爆投下である。『諸君！』（01・11）の座談会の中で、たとえば明星大学教授の小堀桂一郎が次のような発言を行っている。

《ドーリトルが昭和17年4月に東京や名古屋を奇襲した時に、名古屋市で明らかにそれと狙って小学校に対して機銃掃射している事実を、アメリカ人に改めてつきつけてみたいですね。これは攻撃後、中国に不時着した飛行士が「日本人の戦意をうちくたく

ためにやった」と証言していることから明白な事実です。》

《石原慎太郎さんが見事におっしゃっていたように、今回の同時多発テロ攻撃は、前例を求めるならばパール・ハーバー奇襲よりも、むしろ広島や長崎への原爆投下と比較すべきものでしょう。カーティス・ルメイによって生み出された戦略爆撃というもっともらしい名の無差別攻撃によって、日本の主要都市60余りが世界貿易センタービルのように破壊され、何十万という無辜の市民が殺されたわけですからね》

作家の曾野綾子などは、『新潮45』(01・11)の中でもっと激越である。

《暴力も暴力、まさにめちゃくちゃな自殺テロである。あの時、多くのアメリカ人があの攻撃を真珠湾攻撃と比較したので私はびっくりしたが、アメリカも原爆というもっと残虐な暴力を振るったのである。敢えて言おう。世界貿易センタービルの死者は「たかだか6千人未満」だが、アメリカは核兵器の残虐性を知りつつ、テロリストとしてではなく「正義をうんぬんする国家として」二個の原爆を日本の非戦闘員が住む地区に向かって投下したのである。

それによって約20万人はその瞬間に黒焦げになったのである。人の命は数ではない、と言うが、数は揺るぎない事実であり重みであろう。6千対20万という比率でアメリカの方がもっと残虐な国であったと言える。

そして愚かな広島の市民の代表は、アメリカに代わって「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」などと碑文に彫りつけた。彼らは誰の代わりにそのような言葉を選んだのか。その言葉については、私はもう過去に何度か書いているが、日本語として主語が全く違うではないか。その前にも後にもアメリカは、一度たりとも「二度と過ちを繰り返さない」とは言っていないのである。我々はアメリカの代わりに謝ったり断言したりする何の権限も親切も持ち合わさない。》

戦中派の吉本隆明も、加藤典洋との対談(『群像』02・1)で、パール・ハーバーにこう言及している。

《アメリカ人は、要するに、今度のテロも日本の真珠湾攻撃も同じだと思っていたんだなと、逆にびっくりしたわけです。とんでもない誤解だと思うわけ。何十年ぶりにこういう不意打ちの奇襲攻撃を受けたということがいいたいわけでしょうけれども、そうすると、太平洋戦争中の特攻とか真珠湾の奇襲攻撃が、今度と同じように、とんでもねえ迷妄で、野蛮で、わけのわからぬ、何を考えているかわからぬようなやつらの攻撃だなと、同列に思われたんだなということを改めて確認されたみたいな感じが一つあります。

(中略)

アメリカだけじゃなくて、ヨーロッパもそうだと思うんですけども、迷妄で、命知らずで、わけのわからぬ国との戦争だ、みたいに思われていたんだなということを改めて感じて、同時代で、国の中で体験したのはそんなものじゃないんだよという気持ちが起

きました。

あのときは、大多数の国民が、自分たちは及ばないけれども、あの人たちは若さと勇氣と捨て身の忠誠心があってあれができたので、自分たちにもそういうのがあればやりたいところなんだけど、それができなかつたな、というような意味合いでしか受け取っていないですよ。それが大多数の国民の正確な受け取り方です。僕はこの判断に自信があります。抵抗したみたいなのをいう方が全然うそだと、今でも思っているわけです。

この隔たりの激しさは何ともいえないなというふうになるわけですね。》

今回の同時中枢テロにパール・ハーバーを想起した日本人はおそらく皆無であったのに対して、多くのアメリカ人はパール・ハーバーを想起した。その違いがどこからやってくるのかは、はっきりしている。東京財団会長の日下公人が『正論』(01・11)の中で、明確にこういい切っている。《われわれ日本人が見れば、世界貿易センタービルに突っ込んだ行為はかつての“カミカゼ”に近いが、アメリカ人にはパールハーバー(真珠湾攻撃)に見えるらしい。恐らくアラブの人々も一寸の虫の立場からカミカゼと知っているだろう。パールハーバーとは思っていないはずだ。

アメリカにとっては自国の領土を攻撃されたことがパールハーバーと重なって見えるのだろう。彼らはそれをきわめて重大なことと思っている。アメリカにとって歴史上、自国の領土を攻撃されたのは、1812年にアメリカがイギリスに宣戦して始まった第二次英米戦争で、首都ワシントンがイギリス海軍の奇襲によって占領され、ホワイトハウスが焼き打ちされた一事(1814年8月)と、先の大戦での日本軍による真珠湾攻撃だけである。イギリス海軍の奇襲を一回目とすれば真珠湾攻撃は二回目そして今回が三回目となる。》

自国の領土を奇襲攻撃されたという一点が、アメリカ人にとってはいつまでも肝に銘じなくてはならない最大の出来事であるということだ。自国が相手国に原爆を投下するという途方もない残虐さと比較するなら、パール・ハーバーなど些事にすぎないとしても、自国が攻撃されたという一点に立つなら、自国が行ったどのような攻撃との比較も許さない最大の屈辱になってしまうのである。アメリカとはそういう国なのだ。そんなに自国を攻撃されたことを盲目的に肝に銘じるなら、パール・ハーバー以前のイギリス海軍の奇襲をも同様に持ち出してもいい筈だ。だが、それは持ち出さない。その理由はあまりにも昔であるという以上に、もともとイギリス人とアメリカ人は同じ血筋の同胞であり、アメリカにとって英米戦争は宗主国との戦争だったからである。つまり、身内なのだ。日本やイスラムの本土攻撃とは区別されなくてはならないのである。

吉本隆明の発言を聞いてハッとしたのだが、アメリカ人が今回のテロに60年前のパール・ハーバーを重ねるとき、その根底には「とんでもねえ迷妄で、野蛮で、わけのわからぬ、何を考えているかわからぬようなやつらの攻撃」としての受けとめがあるとい

うことだ。よく考えれば、アメリカ大陸を征服したときから彼らは、先住民族の「とんでもねえ迷妄で、野蛮で、わけのわからぬ、何を考えているかわからぬような」インディアンを相手に、大量虐殺を繰り返して征服してきた人種なのである。日本やイスラムのように「野蛮で、わけのわからぬ」連中は、国外にも満ち満ちているということだ。自分たちに刃向かってきた日本については、この間の戦争で原爆を二発お見舞いし、無条件降伏させ、明治憲法を一步も出していない日本政府の憲法案を退けて、象徴天皇 - 武力放棄、欧米並みの婦人参政権や男女平等を採り入れた民主的な憲法をあてがい、羊のように恭順させてきたというわけである。

アメリカがパール・ハーバーを持ちだすのは、おそらく現在の日本に対する威嚇だろうし、パール・ハーバーをきっかけに軍国主義の日本を征伐し、屈服させてきたという自信を自国民が取り戻す効果を狙ったものだろう。パール・ハーバーを今回のテロに重ねたアメリカは、昔悪い子、今いい子の日本をいびるように、テロ事件後、各国との関係で日本を一度も登場させなかった。ブッシュ大統領が自ら話をした首脳として最初にイギリス、フランス、ドイツ、カナダ、それに中国と公表され、パウエル国務長官がイタリア、ロシア、イスラエルの外相に協力を要請した。更にトルコ、エジプト、ギリシャ、スペインなどの国名が出てきても、ジャパンという言葉は聞かれなかったのである。

加藤典洋が指摘したように、「組織化された自殺攻撃」としての特攻、1972年の日本赤軍によるロッド空港襲撃事件での自爆テロ、オウムによる無差別テロと一つ一つ重ねていくと、今回の同時中枢テロが日本と最も深くかかわっていることに気付く。その攻撃のあり方において以上に、その攻撃が発射されてくる「とんでもねえ迷妄で、野蛮で、わけのわからぬ、何を考えているかわからぬような」民族の昏さそのものにおいて、日本は同盟国アメリカよりも、むしろタリバン政権下のアフガンに近いことは間違いない。妻は夫の所有物であり、離婚を申し出る権利も財産権もなく、準禁治産者と同様の扱いを受け、人権という言葉すらなかった戦前の日本を考えると、タリバン政権下のアフガン女性と戦前の日本女性とが多くの面で重なってくる。いくら戦後の日本が近代化されても、その表面の薄皮一枚を剥がすと、アメリカ人よりもアフガン人と共通する要素が一杯詰まっていることは否定しようがないと感じられる。

アメリカからは「リメンバー・パール・ハーバー」といわれつづける日本は、本当のことをいえば、アフガン爆撃に自身の57年前の姿を重ね合わせて、我がことのように深い沈痛の念を喚び起こされることがあってもよかった筈である。というより、そのほうがより自然に近い感情ではなかったか。だが、そのような人は数少ないと思われる。大半の日本人はなにも感じることなく、テレビ画像を見ていただけのことではなかったか。たぶんそうだろうと思ってしまうのは、同時中枢テロが起こる前に上映された映画『パール・ハーバー』に対する日本人のあまりもの戦後ボケした反応から十分読み取れ

るからだ。観る前にパール・ハーバーと題されること自体になんらかの意図を読み込むことのできない貧弱な頭からは、なにも生みだされる余地がないのははっきりしている。

久しぶりに試写会に足を運んだ評論家の井尻千男は『週刊新潮』(01・7・19)の連載コラムで、《60年前の政治的プロパガンダ(思想的宣伝)を一步も出ていない。つまり日本の卑劣な騙し討ち、アンフェアな日本というわけだ。その卑劣な日本を討つために立ち上がるアメリカ。》という図式に、アメリカが日本に最後通牒に等しい「ハル・ノート」を突き付けていた事実を描かなかった映画のアンフェアを怒り、次のような日本軍の描き方を酷評する。《暗いうえにグロテスク。作戦会議が屋外で「尊皇」とか「皇国」と大書した幟(のぼり)を立てている。まるで戦国時代の陣中だが、無知でそうしたとは思えない。無知を装いながら、悪意に満ちた象徴主義をやっているとしか解釈できない。だが何を象徴しているかは判然としない。無気味な黄禍の象徴なのか。小生、アンフェアな大作とって憚(はばか)らない。》

その程度のことすら観る前に予測できなかった彼の脳天気ぶりこそ反省すべきだとこちらは思ってしまうが、私自身観る気がしなかったので、映画評論家の山根貞男の感想(『群像』01・9)も聞いてみたい。日本軍が《なんとも珍妙で、大本営の会議が「皇國」だの「尊皇」だのと書いた大きな旗指物ふうの布を掲げた野外で行なわれたりする。日本軍人が揃ってしわくちやの猿みたいな顔なのもあって、日本人を愚弄していると怒っている向きもあるが、ここまでデタラメだと、唾然とする以外ない。》

《あらためていうまでもなく「パールハーバー60周年」に合わせ、アメリカの国民感情に訴えようという商策は歴然としている。映画をヒットさせるために政治性が導入されたわけで、メロドラマの情緒的刺激も戦争スペクタクルの興奮も、反日感情を煽る方向へ収斂していく。だから迫力たっぷりの奇襲シーンも、真珠湾のあと、報復としてなされる東京爆撃に沸き立つシーンも、日本人としては見ていてじつに居心地が悪い。それでいながら、自国に次ぐ大市場である日本を意識して配慮した個所も少しだが見られ、ますます妙な感慨をもたらす。やはり珍品のハリウッド大作というべきであろう。》

「アンフェア」で「珍品のハリウッド大作」の中では、登場する日本軍人があまりにもグロテスクなために、「日本人としては見ていてじつに居心地が悪い」のは当然だとしても、特にエンターテインメント性の強いハリウッド映画に登場する日本人や日本家屋のほとんどが、それが和風の料亭であれ、一般家屋であれ、我々日本人から観ると、台湾か香港風がチャンポンになったなんとも珍妙で、「見ていてじつに居心地が悪い」。映画『パール・ハーバー』では、その描写の珍妙さが際立っているだけなのであろう。問題は、かつていまでも日本人はアメリカ人にそういう風に見られているという点にあるにちがいない。日本映画がアメリカ人を登場させる時にも、同じ珍妙さを露出させることになるのかどうかはわからないが、映画『パール・ハーバー』が悪意のために歪めて

日本軍人を描写しているというよりも、おそらく日本人に対する米国民のイメージに即して日本軍人を描写していくと、そんな珍妙さにどうしても落ち着いていくのだと思われる。

アメリカ人には等身大の日本人が見えてこないから、映画でもありのままの日本人をどうしても描写できないのだ。なぜ彼らには日本人がわからないのか。普通の姿そのまま映画は日本人を描写できないのか。それは吉本隆明が語ったように、「とんでもねえ迷妄で、野蛮で、わけのわからぬ、何を考えているかわからぬ」、自分たちと同じ種類の人間とはみなしていないからではないのか。その違いはたとえば、欧米人に対する日本人のまなざしが憧れに包まれているが故に美化されていくのとは逆に、日本人に対する欧米人のまなざしが侮蔑を多く含んでいるが故に、矮小化されていくのではないか。したがって、映画『パール・ハーバー』は、アメリカ人のイメージ通りの日本軍人を描写してみせただけなのであろう。

「リメンバー・パール・ハーバー」はいくら日米関係が緊密なものになろうとも、アメリカは心底から日本に気を許しているわけではないことを浮き彫りにしてみせた。パール・ハーバーという言葉を目にして、多くの日本人は驚いたが、そこに逆に照らしだされるのは、たとえば「リメンバー・原爆」を忘却して、アメリカに気軽にすり寄ろうとする脳天気な国民性である。曾野綾子は『諸君！』（01・12）の対談で、「日本人はなぜか、恨みというのは醜いものだからすぐ水に流せ、といった美德のようなものを持っていますよね。ところが、タリバンも含めた外国人は決して恨みを消さない。恨みをずーっと持って行って、それを生きる力に変え、自らの行動規範に組み込んでしまう。いい悪いの次元ではなく、そういうものなんですね。そしてその恨みと「報復」の関係は、宗教によって微妙に違ってきます。それこそ日本人は恨みを「水に流す」と言うけれど、いつも流れている川を見たことがない人だったら、言葉の意味すら通じない(笑)」と語っているが、日本人は自分が怨みを消して生きているように、相手も怨みを消して生きていると思込みがちだけれども、そうではなく、むしろ怨みを消さずに生きている多くの外国人に日本人は取り囲まれていることを知らなければならない、と忠告しているのだ。つまり、「リメンバー・パール・ハーバー」から汲み取る必要があるのは、なにもかも怨みを水に流してしまうのではなく、けっして水に流してはいけないし、流すことのできない怨みもあり、「それを生きる力に変え、自らの行動規範に組み込んでしまう」ことが、いま真剣に問われているにちがいない。

2002年3月10日記